

なお当時活動が続けていた多くの組合があったのだが、今記憶に残っているのは日本労働組合自由聯合協議会、東京技工組合、関東金属工組合、全国印刷工聯合会があり、その印刷工聯合会の中に、東京印刷工組合、横浜印刷工組合、上毛印刷工組合三山会、函館印刷工組合、京都印刷工組合、千葉印刷工組合千工会、長野印刷工組合兄弟会、大阪印刷工組合などがあった。

十七 農民自治会

十七 農民自治会

大正十二年九月一日の大震災に遭遇して、われわれは、新たな方法をもって運動を起さねばならなかったことはすでに述べた通りである。諸方に自由聯合主義の労働運動が計画され、黒色青年聯盟が組織され、雨後の筍の如く種々なる団体、種々なる運動が起された。どの運動にも直接または間接に、私は関係を持ったけれども、私の最も深く共鳴したものは、農民自治会のそれであった。私は日本の農民の間に自主的の組合運動のないことを不思議に思っ、まずこの運動から手をつけなければならぬということを中心していると、ちょうどその時下中弥三郎君、中西伊之助君らの間にもその意図があつて、まもなく農民自治会の組織が試みられた。機関誌として『自治農民』という小さい雑誌が発刊せられ、組合員も予想外に勢よく増加し、その前途には洋々たるものが展望された。この会合で私が最初に行った講演は「土の権威」と題するものであった。たしかキリスト教青年会館の一室で行ったと思うが、この講演はかなりの印象を聴衆に与え、評判もよかった。大西伍一君のペンによ

るその速記録を同じ表題のもとに、私の共学社から出版したが忽ちにして売りつくされ、再版も品切れとなり、三版まで出したと思う。この講演の結論は次の通りである。

眞の生活は宇宙の無限に即した生活でなければなりません。換言すれば權威に頼らないで幻を全く振り捨てた生活に立ち還らなければなりません。総ての迷ひ、汚れ、幻を捨てた生活は即ち土着の生活であります。然らば現在土着の生活をしてゐる者は誰であるか。今日の農民は土の上に生活はしてゐるものゝ、都会の商業主義に感染して多くの幻と迷ひとを捨てることが出来ません。即ち土を虐待し土を汚してゐるといふべきであります。殊に農民の味方と自称する農民党の如きは土を荒すものであります。又、我々の如く単に農民自治会を起すことが直ちに土に忠実な所以ではありません。眞に土にかへることは我々の原始生活をこの現在社会に恢復することです。地表に我々の生命が植えつけられた時の環境を愛護し、假令文明の利器を利用して、益々我々の原始の生活を維持し豊富にすることです。

その生活は政治によつて支配される中央集権の社会では実現されない。自治の社会にのみ実現されるのであります。他人が他人を支配しない、又は統治しない社会にのみ実現されるのであります。

宇宙は無限のものであり、その無限の網の結び目に相当するのが我々の個体であるとするならば、お互は無限の連鎖の一つであります。お互は連帯生活をしなければならぬ道理がこゝにあります。但し連帯生活といふのは社会が動物的の有機体となることではありません。有機体といふのは例へば人間の体の如く、頭となつて命令する部分もあるれば手となつて労働する部分もあり、又、足の裏となつて踏み躪られる部分もあるといふことになります。我々は無限の中の一個の生命として、それ／＼独立の生活を持つて居り、また自由なものであります。必然の過程とか必然の法則とかいふものはありません。何物にも束縛されない自由の独立の存在であります。必然の法則が考へられるのは無限の中における我々の自由の生活々動の一つの手段としてに過ぎないものであります。即ち我々の有限の活動に於てのみ、必然の法則が用をなすのであります。我々の生活は何等の必然から来たものではありません。宇宙の無限の中に生じたものであります。

この無限の相对生活の中に我々が連带的に生活を築くとすれば、それは自治によるより他ないのであります。総てのものが自治することによりて地に即した生活が行はれます。自治の徹底したものは即ち土民生活に他ならぬものであります。今日の選民によつて侮蔑せられてゐる土民の生活こそ最もよく無限相對の宇宙の事実に即した自然の生活であります。〔……〕

集中されてゐたものゝ分散する例として著しい例は知識であります。知識は今までは選ばれた少数の人によつて独占されてゐましたが、今日では新聞、雑誌、書物等によつて盛んに普及され、知識の程度がだん／＼平均されていきつゝあります。今日は尚ほ集中的である政治組織なども、知識と同様にだん／＼分散されていくことゝ思ひます。〔……〕

我々の考が定まつて如上の様な社会の諸現象をみた時に、今日まで世間に伝へられて来た社会思

想や、社会運動に対しても新しい見方が必要になつて来ます。同時に我々自身の行くべき道を立てねばならぬことになります。

私自身としては今後の社会生活、社会運動に於いてなすべきことは「土の權威」を發揮することにあると思ひます。天国と地獄、選民と土民、治者と被治者、中央と地方等の階級思想や差別生活を打ち破つて、すべての人が土民として原始の精神にかへるようにしたいものであると思ひます。

次に農民自治会機関誌『自治農民』創刊号に「吾等の使命」〔本著作集 第二卷所収〕と題した私の一文がある。それは次の如きものである。

清い艶やかな蓮華草は、矢張り野の面に咲き蔽ふてこそ美しいのである。谷間に咲ける白百合の花は、塵埃の都市に移し植うべく、余りに勿体なくはないか。梵音稀なる山奥に春を歌ふ鶯の声を聞いて、誰か自然の歌の温かさを感じないで居られやう、然るに世の多くの人々が此美しい野をも山をも棄てゝ宛がら「飛んで火に入る夏の虫」の如く、喧騒、雑踏、我慾、争乱の都会に走り来るのは何故であらうか。

二

支那太古の民は壤を撃ちながら歌つた「日出でゝ作り、日入つて息ひ、井を鑿て飲み、田を耕して食ふ。帝力我に何かあらんや」と。「帝力我に何かあらんや」などと如何にも不忠の民の様に聞え、堯の聖代の事実としては受取れない様に思れるが、決して、さうでは無い。是は堯の如き聖者の下に於ては、余り善く世の中が治つて、其恵みが行き渡つて居ることを記したものである。宛も太陽の恵を吾々が忘れて居る如く、天子の威力が眼立たないのである。こうして農民が鼓腹を撃壤して人生を享樂することが出来るならば、農村は誠に明るい処となり、哀れな忙はしい、都会などには行きたいと思はないであらう。夏の虫が火を眼がけて飛び込むのは、暗い夜のことである。我慾の猛火が漲つてゐる都会に、世の人々が引き付けられるのも、矢張り暗黒の時代に限つて居る。

自然は美しい。山下林間の静寂地に心の塵を洗ひ、水辺緑蔭の幽閑境に養神の快を貪るといふ様な事は、誰しも好ましく思ふ処である。然るに今日の農民は、美しい自然の中に生活しながら、其れを享樂することが出来ない。山紫水明の勝地は傷ましくも悉く都会のブルジョア、金持達の蹂躪する処となつて、万人の共楽を許さない。資産ある者は、文明の利益をも、美しい自然をも、悉く独占して、その製造と耕作とに従事する労働者や農夫等は、却て其文明の為に、自然の為に、又資本家、地主の為に、徒らに労働の切売をして居る。之に於て、農夫も一箇の商人となつた。右手に鋤を持ち左手に算盤を弾く商人となつた。殊に其精神に於て全然商人と化して了つた。如何に能く地を耕やし、如何に善き収穫を得んか、といふことが問題ではなくて、唯だ如何に多くの利益(金銭)を得やうか、といふことのみが重大なのである。農夫の心は既に土地其ものから離れたのであ

る。土地への愛着を喪つて、只管金儲を夢見る農民が、夏虫の火中に飛び込む如く、黄金火の漲る都会を眼がけて走り寄るのは当然である。〔……〕

四

然らば此希願は如何にして成就し得るか。其第一要件は即ち自治である。自治は万物自然の生活法則で、此法則は人間にも実現されねばならぬ管である。鳥は飛び、魚は泳ぎ、地球は自転して昼夜をなし、太陽の周囲を廻つて春夏秋冬をなし、禽獸草木、風雨、山河、互に連帶關係を保つて互に自治し、無礙自在であつて滞る処が無い。人間同志の生活もかうありたいものではないか。極めて少数の例外として生物相食むの事実があるのを見て、人間が自ら静思熟慮の上之を模倣して全生活の原則とする如きは、誠に浅ましい次第では無い。蟻の集団が如何に宏大なる共同倉庫を造り如何に巧妙に冬越しの食物を貯蔵するかを見よ。蜜蜂の活動が春から夏にかけて如何に激しきかを知る者は、直ちに其蜂殿に蓄積せられる蜜の豊かにして甘いことに想ひ到るであらう。彼等が其共同生活の為に一糸乱れず自治的労働にいそむ様は、実に涙ぐましい程立派なものである。個々の者が自治の精神に生きなければ、真の共同生活は成立しない。此間に威力の干渉が加へられると共同も自治も共に傷けられる。蜂の営舎にも、蟻の村落にも、強権といふものは行はれない。こうして工業と農業とを綜合したる此等小動物社会の生活こそ、哀れにも疲れ果てた吾等人間の苦境を改善すべき好箇の模範では無い。

世界は今や生存競争主義の都会文化、商業精神に依つて暗黒になつて居る。自然から善いものを恵まれやう、世の為に善き物を生産しやう、自分の技術の為に全生命を打ち込まう、といふ様な精神は今の商業時代には存在し得ない。宗教も、教育も、産業も、芸術も、悉く一種の商売と化して世の中は陰鬱暗澹たる修羅の街となつた。そして此暗い世の中を明るくし得るの第一の方法は、先づ吾等農民が自ら眼覚めて真に土の民衆たる本来の自己に立ち還へることである。自ら土の民衆となつて、世界の農作と工業と生産と交換とを自分自身の掌中に回復することである。蜜蜂の如く、蟻群の如く。

五

生存競争、金力万能の幻影的近代思想が築き上げたバベルの塔は、即ち今の商業主義の都会文化である。何物をも生産することなしに、他人の懐を当にして生活する寄生虫の文化である。吾等は最早このバベルの塔に惑はされてはならぬ。吾等は野を蔽へる蓮華草の如く平等、平和の協同生活に立ち帰り、谷間に咲ける百合の如く、自然の芸術の芳烈なる生活を自ら誇るべきである。

新しい春の陽光は、今当に山深き谷間をも照して来た。清浄無垢なる可憐な小鶯が伝へる喜びの福音をして、断じて都会の塵風に汚さしむる勿れ。

この農民自治会の運動は、前途有望な運動であると思つたが、信州の一部、或いは静岡県の一部にその印象を残しただけで、あまり深く根をおろすに至らなかつた。それは当時一方にはボルシェヴィキの攻撃が激しくなり、他方には保守的反動や、軍国主義が勢を得て、吾々の運動はその挟み打ちに

なったのである。そして機関誌『農民自治』もやがて廃刊するに至り、会員の団体運動は影をひそめるに至った。しかしこの運動の蒔いた種は、今も至る所に存続して機会のある毎にその芽をふきつつあることは愉快である。満州事変が勃発し、やがてそれが日支事変となり、さらに太平洋戦争となり、この暴風にあおられて吾々の運動は吹き倒されてしまったが、しかし一旦蒔かれた種は陽春來復と共に芽を發せずにはおかないであらう。自由聯合主義の労働組合でも、農民自治会の協同的運動でも真に要求されるのはこれからである。

最後に諸地方におけるこの運動の中心人物となった人々の名前をここに思い起す。

△埼玉県 渋谷定輔、岡正吉、田口智

△群馬県 栗原藤七郎

△福島県 庄司吉之助

△青森県 菊地源吾

△北海道 更科源蔵

△秋田県 中村次郎、伊藤為之助

△新潟県 川口桑吉、山田忠兵衛

△長野県 平林竜男、朝倉重吉、小山四三、関和男、唐沢憲一郎、柳沢恰、塚田義光、北原真木夫

△静岡県 加藤弘造、平田茂

△大阪府 河本乾次

△京都府 奥西吉太郎

△兵庫県 奥谷松治

△東京都 大西伍一、大塚貞三郎、川合仁、田辺清春、中西伊之助、鎌田貞子、小山勝清、下中弥三郎